

## おばけの季節【モノガタリ篇】

陽羅 義光

3D4D5Dの時代である。

小説はもちろん、おばけの話も、そいつに負けるわけにはいかん。

いままでの作者は、平面的すぎました。

顔がでかいとか、目が血走っているとか、口が耳まで裂けているとか。

目も鼻も口もないとか、手足が十本あるとか、頭に角が生えているとか。

けれどもこれからは、たとえば顔がでかいのを、平面的に描写せずに、立体的にやらねばあかん。

顔がふつうの人の十倍とやっただけでは、このおばけの本当のおそろしさがわからん。

頭部が後ろにどんと長く、でかい顔の十倍もあるかもしれません。

となると脳味噌の量も莫大だから、頭のいいおばけということになるかもしれません。

しかし頭の中身はからっぽで、鼻の穴から空気が出し入れされているかもしれません。

もしそうなら、その独特の呼吸の音や、息の臭さも書かないとなりません。

このおばけが歩くと地響きがするということなら、その震度も記さないと、おそろしきは伝わりません。

以上は例にすぎないが、どんなおばけでも、その特徴に就いては、立体的に多角的に、表からだけではなく横からも裏からも視る必要があります。

だが読ませるものであるからには、しつこくもできないから、どこに焦点をあてるかでしよう。

そんなことをかんがえながら、これからのおばけは書くつもりだが、もしかするともう書き尽くして、おばけが残っていないかもしれません。

その場合は、いままで書いてきたおばけをぜんぶ改作して、より鮮やかなより怖いより醜いおばけにしていきたい。

尤も、かんがえることとやることの相反する作者であるからして、確約はできません。

禿光山人 拝

\* \*

「かいじいよ、おばけというと、あくがそうばじゃろ。ぜんのおばけは、いるんか

のう」

「善のおぼけですか。あれれ、金ちゃん、いままで逢ったことなかったですか」

「おったかもしれんが、それほどわるでもないが、それほどよくもないのう」

「そうでしたっけ。人間にも、悪人と善人がいますからねえ。当然おぼけにだって、悪おぼけと善おぼけはいますよ。もっともその比率は、百万対一くらいでしょうがね」

「ぜんおぼけというやつを、しりたいのう」

「まあ、結果善というものですがね」

「なんじゃそれ」

「きまって悪人をこらしめるおぼけだから、善おぼけ」

「なるほどのう。わしがあわなかったのは、わしがあくにんじゃないからかのう」

「残念ながらそうなりますね」

「するてえと、かいじいのばあいは、どうなんじゃろ」

「残念ながら悪人かもしれませぬ。善おぼけに随分こらしめられました」

「なっとくじゃのう」

「それでは今日はこれで」

「かいじいまでや、わしがわるかった。いいかたまちがえた。なっとくじゃのうて、なっとうじゃ」

「納豆、ですか」

「ぜんおぼけは、なっとうみたいに、ねばねば、しっこそうじゃのう」

「それがそうでもないんです。ねばねばやってはきません。なぜなら善おぼけは、物ですから」

「もの、かい」

「基本的には、動かない物なんです」

「うごかないのに、おぼけかい」

「動きませんが、語ります」

「たたるんか」

「崇る、ではなく、語るです」

「かるたかい」

「歌留多、ではなく、語る、です」

「しっとるわい。ふざけただけじゃ」

「それでは、金ちゃんが知らないことを、語りましょうね」

「また、うんちく、かい」

「うんこでも、ちくしょうでも、蘊蓄でもありません。物語ですよ」

「ものを、かたるんか」

「はい、物を語る。のみならず、物が語る。この物とは化物です。化物が語る」

「ええのう、ええのう」

「ただいまより、わたしに霊が憑きます」

「ええのう、ええのう」

\* \*

【せきれい（石霊）】

おい、そこのお前。

おれの話を受け、五分だけでもいい。

おれは、いまじゃ、こんな草むらのなかで、鎮座（ちんざ）ましましておるが、もとはといえば、かの大善寺の庭石だったのだぞ。

おい、そこのお前。

おれの話信用するなら、お前には霊力を発揮せんから、心配しないで、おれの話を受け。

あれはいつのことだったか、そう、平安時代がそろそろ終わる、そんな予兆（よちょう）がしはじめたころだったか。

おれは、おれの庭に近寄る、皇族や僧侶や武士たちに、霊力を発揮して、洗脳（せんろう）したものだつたよ。

そのころはすでにご老体でも、かわらぬ権勢をふるっていた白河法皇（しらかわほうおう）さまは、かくべつおれの庭がお気に入り、さらにかくべつおれがお気に入りだったものよ。

それでおれは、法皇さまが近寄ってくると、かならず声をかけさせてもらったものじゃ。

「法皇さま、本日もご機嫌がうるわしく、というわけではなさそうでござりまするな」

「それがのう、余が長年寵愛（ちょうあい）しておる、中宮璋子（ちゅうぐうしょうこ）がのう」

「待賢門院（じけんもんいん）さまが、いかがなされたのでござりまするか」

「北面の武士の佐藤義清（さとうのりきよ）に、うつつをぬかしておる」

「義清さまには、ご妻子がおありとか」

「そんなことは関係ない。男女の仲は魑魅魍魎（ちみもうりょう）じゃ」

「お株をうばわれた気分ですな」

「なんとしたものかのう」

「おまかせいただければ、万事よろしいように」

「見返りはなんじゃ」  
「申しにくいのですが、法皇さまのお命」  
「よかろう。どうせ明日をもしれぬ老体じゃ」

というわけでおれは、渾身（こんしん）の靈力を法皇さま、璋子さま、義清さまのお三方に発揮したのじゃ。

けっか、法皇さまは崩御なされ、その後、義清さまは出家なされて西行と名のられ、その後、璋子さまも出家なされた。

お前はこれを、歴史の必然というのか。

呆れた唐変木（とうへんぼく）じゃのう。

歴史的な推移からいうなら、法皇さまの崩御、璋子さまの出家、義清さまの出家の順番であろう。

だがそうすると、世間にこのお三方の、ただならぬ関係がばれる。

よって、おれがおれの靈力によって、そういうことにしたんじゃ。

おい、そこのお前。

居眠りなんぞしておってからに、おれの話を、ちゃんと聞いておったのか。

約束どおり、五分で終わらせたものを。

### 【もくれい（木霊）】

ええ、そうよ。

あたしは、もうずいぶん長いこと、この荒れ地に独りで棲んでいるの。

百年だって、あんた、莫迦にしないでよ。

そのていどの木なら、五万といるわ。

あたしは、樹齡千年。

荒れ地に棲んで、四百年余り。

そう、以前は、【かれい（花霊）】とよばれていたこともあるのよ。

この木には、この世のものとはおもわれない、美しい花が咲いたものだからね。

信じないなら、いいわ。

それならおそらく、これからあたしが話すことも、あんたは信じてくれないだろうね。

このあたりは、むかしは荒塵山と呼ばれていたの。

名前とちがって、いろんな花々が咲き乱れていたわ。

それじゃ、いつからその名のおり、荒れて塵の吹きすさぶ地になったかという

とね。

江戸時代が始まる前の、西暦でいうと一六〇〇年、あの関ヶ原の合戦。

それくらいは、知っているわよね。

そう、徳川家康の派と石田三成の派があらそった、天下分け目の戦い。

あたしは、どちらの味方でもないわ。

ただね、合戦が始まる前に、あたしのところに、徳川家康がわざわざやってきたのね。

あたしはそのころ「神木」だなんて、いわれていたもんだからさ。

「この戦さ、なにとぞ、神木様のお力をもって、我が徳川軍に勝利を、御願ひ奉ります」

なんて、ずいぶん畏（かしこ）まって祈願するものだから、あたしもつい、情にほだされちまってね。

「いいよ」

って、つぶやいてしまったのさ。

さあ、それからが大変。

あたしは靈力を限界までつかって、まずは石田三成の采配（さいはい）から〈運〉を取り去ったり、その盟友（めいゆう）大谷吉継の病気を重くさせたり、西軍の小早川秀秋が裏切るよう仕向けたり、はてはすでに寿命がきていた徳川家康を長寿にさせたり、他にもあれこれやったものさ。

だいたい、あんた。

歴史をすこしでも勉強した者なら、あんなにもろくも、西軍が東軍にやられるなんぞ、日本の七不思議とかんじるだろうよ。

あたしのおかげだよ、あたしのせいだよ。

まったくねえ、徳川家康というやつが、これほどまでに恩知らずとは、おもいもせなんだ。

勝利の感謝を捧げに、あたしのところにやってくるどころか、大戦さで荒れに荒れた、荒塵山をすっぼかして、お江戸の繁栄にばかり、こころをくだいたのさ。

その遺志は二代秀忠、三代家光と続き、いまだに荒れほうだいというわけ。

なあ、お前。

こんなことは学校でも習わないから、いい勉強になっただろうよ。

【きれい（器霊）】

はい、あなた。

わたくしは、よく【もくせい】とまちがえられますの。

あなただけでも、「木」は「もく」と読んで、【きれい】の「き」は「器」であることを、いつまでも覚えておいてくださいまし。

じつはわたくしは、安土桃山時代に、とおく中国大陸から、海の潮にのって流れてきたのです。

ずいぶんと小さな国にきてしまって、さびしいおもいをしましたが、わたくしを越後の浜辺で拾った漁師さんが、その地のお役人さんにお渡しになって、こんどはそのお役人さんが上役の方に譲って、その上役の方が関西の大名様に献上（けんじょう）して、その大名様が、お茶のお師匠の利休（りきゅう）様に差し上げられたので、わたくしは長い間幸運にも、陶器の目利きでもある、敬愛する千利休様のおそばで暮しておりました。

あるとき、それは忘れもしません、利休様がわたくしを手にとって、つくづく観察していたときのことですわ。

わたくしはおのれの霊力をかんじたのです。

それはどうしたわけなのか、おのれではまったく解りません。

なんと、利休様のお命の危機を、察知してしまったのでございます。

しかもどうやら、利休様ご自身が、その大事に気づいているのでした。

利休様のお命を奪うとしたなら、太閤（たいこう）秀吉様のほかにはかんがえられませんか。

はい、あなたのご質問、ご疑念はもっとものこと。

しかし、人間というものは、幾つになっても、どれだけ偉くなっても、浅はかなものです。

いくら長年、その人を大切に庇護（ひご）してきても、いくら深く、その人を敬慕（けいぼ）してきても、その人が自分よりも偉大だと認識してしまったとき、一番上に立つ人の心は、癒（いや）しようのない嫉妬で満たされるのでございます。

かつて歴史の上で、主君に殺められた、太田道灌（おおたどうかん）様など、似た例はすくなくあります。

ともかくわたくしは、苦しくなって、利休様に声をかけたのでございます。

「利休様、どうかお逃げくださいませ。わたくしがお案内いたします。利休様なら大陸でも大切にしてくださるでしょう」

「そなたの忠告はありがたい。けれどもわしは、自分の運命に従うつもりなのじゃ」

「それで一体、だれが喜ぶというのでしょうか。利休様がお長寿なされれば、多くの人々が喜びを与えられます」

「それならばわしは、いかがすればよいのかな」

「万事わたくしにおまかせください。利休様はわたくしを手にしていけばよろしいのです」

「そういったそう」

これほど素直に、利休様が応えてくださるとは、おもいもしませんでした。わたくしはすべての霊力をもって、利休様の御身を大陸にはこびました。

太閤様はそのことをごぞんじでしたが、お立場もあることですから、利休様を切腹させたこととして、世間に喧伝するよう、石田三成様にお命じになったのでございます。

はい、あなた。

わたくしは大陸で、利休様と幸せなときを過ごしました。

それでも、人間には寿命があります。

利休様は百歳で天寿を全うされました。

いえ、あなた。

器にだって、寿命はあるのですわ。

ですから、いまはこんなに色つやもわるくなり、ひどくひびわれて、みるも無惨な有様ですこと。

あら、あなた。

そんなに見つめないでください、それだけで、まっふたつに割れてしまいそうな心地がいたします。

## 【これい（鼓霊）】

きみ、ぼくの名前を知ってるかい。

むかしは【たいこれい】と聞いたんだ。

でもさ、当節短くするのが流行りだから、いつのまにか【これい】になっちゃまった。

それでも、鼓（つづみ）の霊ではなく、太鼓（たいこ）の霊だから、まちがえないようにね。

きみ、元禄（げんろく）時代の「忠臣蔵（ちゅうしんぐら）」って、知ってるかい。

そうだよ、赤穂浪士（あこうろうし）が主君の仇を討ったんだ。

そう、そのときのことさ。

大石内蔵助（おおいしくらのすけ）に、仇討成就の祈願をされたんだがね、ほぼ

同時に吉良上野介（きらこうずけのすけ）にも祈願されてしまったんだ。

上野介の祈願はもちろん、命ばかりはお助けを、っていうものさ。

かんがえにかんがえたぼくは、内蔵助にこう伝えたんだ。

「仇討成就は叶えるが、成就しても、赤穂浪士の命は保証しないよ。それでよければ、討ち入りのときに、ぼくを叩きなさい」

とね。

ぼくは世間がいうところの、山鹿（やまが）の陣太鼓ではないんだが、どんな音でも出せる特技がある。

内蔵助は、ためしにぼくをたたいてみて、喜んだわけさ。

前後してぼくは、上野介にこう伝えたんだ。

「命は保証するが、命が助かったら、その後は名無しの老人として生きるんだよ。太鼓が鳴らされたら、身替わりを置いて、下男の姿をして逃げなさい」

とね。

本番は、きみも知ってるよね。

内蔵助の陣太鼓が鳴らされ、赤穂浪士は討ち入った。

きみの好きな、堀部安兵衛も不和数右衛門も活躍したよ。

上野介は首をとられたが、それは身替わりの首さ。

そのことを、なぜか内蔵助は知っていたね。

それでも知らんふりをして、仇討成就の勝鬨（かちどき）をあげたのさ。

それからしばらくして、赤穂浪士はみな、静かに切腹したというわけさ。

ほんものの上野介は、どうしたかって。

下男の姿をして、（上野介の長男が当主をしている）上杉家の上屋敷に逃げ込んだんだが、信じてもらえなかった。

いや、なかには信じた者もいたが、それを認めるとややこしいことになるので、信じないふりをしたんだ。

それで上野介は、江戸市中を放浪して歩き、しばらくして野たれ死にしたよ。

きみ、ぼくを冷酷だなんて、おもってはいけないよ。

ぼくはちゃんと、約束を果たしたんだからね。

## 【がんれい（岩霊）】

金ちゃん、金ちゃん、義経様のことは、大好きでござるか。

牛若丸と弁慶の、京の五条の橋の上の闘いは、絵本で見たことがあるでござろう。



これから、その義経様のことを話す所存じゃ。  
かくいう拙者こそは、弁慶。  
いや、正確には弁慶の霊でござる。  
かつては、「弁慶石」とか「弁慶岩」とか呼ばれたものの、いまでは省略されて、**【がんれい】** じゃ。

さて、実兄である鎌倉将軍、源頼朝（みなもとのよりとも）から追われて、奥州平泉まで逃げ延びた義経様は、結局裏切られて、衣川の館で自害したというのが定説だけれども、ほんとうは義経様は、秘密の抜け穴から逃れたのでござる。

それを画策したのは、拙者であるが、拙者はその前に、いわゆる「弁慶の立ち往生」で戦死しておったから、拙者の霊が乗り移った**【がんれい】**が、義経様に逃げ延びるよう進言したのでござる。

義経様はなかなか頑固でござった。  
もはや命運は尽きたと、館に火を放ったのでござる。  
拙者は、義経様の従者に命じて、秘密の抜け穴の蓋を開かせた。  
さらに、義経様の甲冑を脱がせて、それを家来の亡骸に着せるよう命じた。  
ついでに、雨を降らせた。  
そこまでやると、さすがに義経様も、その気になってくれたのじゃ。

幸いなことに、頼朝の元に届けられた首は、腐敗していて、見分けがつかず、しかたなくそれを義経様の首としたようじゃ。

その後の義経様のことか。  
金ちゃんも、知りたいか。  
義経様は、八戸から舟に乗って、蝦夷（えぞ）の地、いまの北海道に渡ったのでござる。  
そうして、蝦夷の民に愛されて、蝦夷の王になったんじゃが、頼朝が蝦夷を攻めるといふ噂が出て、蝦夷の民の尽力によって、蒙古（もうこ）に渡ったんじゃ。  
それで、蒙古の王になった、というのは、噂に過ぎず、義経様は（静御前によく似た）蒙古の娘と結婚をして、蒙古の一民として、幸せに暮したそうじゃ。  
めでたし、めでたし。

拙者か、拙者のことは、どうでもよかろう。  
ただひとつ、いっておきたいのは、その後頼朝が落馬して死んだが、あれは拙者の霊力によるものだってことじゃ。

## 【せつれい（雪霊）】

金ちゃん、雪って好きでしょ。  
私は自己愛ってものがないから、嫌いだな。  
よく「雪の精」っていうけれど、私はそんなしゃれたものではなくて、単なる雪の霊。

私が活躍したのは、鎌倉時代よ。  
鎌倉三代将軍といえば、源実朝（みなもとのさねとも）、歌人としても有名ね。  
兄頼家の遺児公暁（くぎょう）に、鎌倉八幡宮で殺されたのよ。  
いまでいえば二十六歳、若死よねえ、あわれよねえ。

この日は雪。  
私が出番。  
実朝将軍も出番で、大切な儀式があったのよ。  
早朝、将軍は、私を眺めながら、おのれの運命を尋ねたのね。  
「今日は、死ぬ日です」  
正直に、私はいったわ。  
霊は、嘘をつくなんてことができないから。  
将軍はなにもいわずに、うなずいただけ。  
自分でもそんな予感があったんでしょうね。  
将軍は、館を出る時に、歌を詠んだわ。

出でていなば主なき宿と成りぬとも軒端の梅よ春を忘るな

重臣のひとり、大江広元（おおえひろもと）は、儀式に向かおうとする将軍を見て、涙を落としたのよね。  
このひとも、予感があったんでしょうね。  
それで、束帯（そくたい）の下に、武具の腹巻をつけるよう勧めたの。  
将軍は、（首を打たれれば腹巻きなぞ意味が無い）  
と断ってしまったわ。  
そうして、結髪のために側で奉仕していた人に、形見として鬢の毛を一本抜いて与えたの。

覚悟というよりも、諦念でしょうか。  
将軍は、牛車をおりるときに、自分の太刀をわざと突き折ってしまったのは、たとえ殺されても殺したくはないという気持のあらわれでしょうか。

将軍が公暁に首をとられる寸前に、私は将軍に約束したのよ。

あなたの命は消えるけれども、あなたの残した歌は決して消えないと。

### 【しよれい（書霊）】

聞くところによると、そなたは、だれよりもよく読書をするとか。

しかしながら、貧乏なので、図書館を利用するから、書物は家には置いていない  
そうな。

それは、よいことだのう。

吾輩は、書物の霊、【しよれい】であるぞ。

そんなに妙な顔をせんでもよい。

物に霊が憑いているのは当たり前、書物も文字通り物であるからして、吾輩が憑  
いている。

けれども、どんな書物にも憑いているわけではなく、まあその吾輩は古書に憑く  
霊であることよ。

そなたは、古書なんてものはまだ読まんから、心配なかろうが、真の読書家とい  
うものは古書を読むものである。

幕末随一の読書家に、吉田松陰（よしだしょういん）という先生がおった。

松蔭先生が開いていた〈松下村塾〉の門下生は、久坂玄瑞、高杉晋作、吉田稔麿、  
入江九一、前原一誠、山県有朋、伊藤博文、品川弥次郎、松本鼎、山田顕義などが  
おるから、大変な影響力ということになるな。

松蔭先生のこまかい経歴は、いずれそなたも勉強するだろうからさしておいて、松  
蔭先生の肖像画が残っていて、それを見ると、そなたも老齢の先生とおもうだろ  
うが、先生の享年は二十九歳である。

刑死する前に、江戸伝馬町の牢にて『留魂録』を書き遺すのだが、後年先生を研  
究する学者は、先生があまりにも命を大切にしないことを、いやそういう先生が幕  
末に存在した事実を、日本史の七不思議と呼ぶそうな。

だが先生の早世に、吾輩がからんでいることを見破る学者は、いまだに出てはい  
ない。

あるとき、それは先生が〈安政の大獄〉の犠牲になる直前であったが、吾輩は先  
生に問うたものである。

「先生は、門下生たちに何を求めておられるのか」

先生は躊躇することなく答えたものである。  
「みなみなの、自尊と自立と自由である」  
「ならば、先生の存在が堰（せき）であることよ」  
「われも、そう考えておる」  
「それならばよい。門下生たちは、先生の屍（しかばね）を越えて、行くであろう」  
「われも、そう考えておる。しかしながら、その言葉で決心がつきもうした。かたじけなし」

というわけで、先生は命を惜しまずに死んだ。  
いわでもがなのことを言い、井伊直弼の幕府に刑死の口実をあえて与えた。  
これは、かたちは刑死だが、内実は自死である。

なんと、吾輩も、いわでもがなのことを言ったとな。  
そなたは、厭なこどもであるな。

### 【きんれい（金霊）】

金ちゃん、金ちゃん、わしの兄弟、金ちゃん。  
よろこべ、わしは、【きんれい】というんじゃ。  
金ちゃんの金が、なんの金かは知らんが、わしの金は、お金の金じゃあねえ、金玉の金じゃ。

だどもわしは、凡人にはとり憑かんぞい。  
偉人のみに、いんきんたむしのごとく、性病のごとくとり憑くんじゃ。  
とり憑いたなかで、最も偉大な人は、西郷隆盛（さいごうたかもり）じゃったのう。  
わしは西郷どんの金玉にとり憑いて、金玉を十倍に膨らましたんじゃ。  
医学的には〈脱腸〉というやつじゃろうが、文学的には〈金霊〉にまちがいなしじゃ。

西郷どんが、どうしてあれほど純粋で高貴で、どうしてあれほど周りに敬愛されたのかのう。  
どうして内村鑑三（うちむらかんぞう）をして、〈代表的日本人〉といわせしめたか、また新渡戸稲造（にとべいなぞう）をして〈最後の侍〉といわせしめたのかのう。  
それは、わしのせいじゃ、わしのおかげじゃ。

あるとき、わしは西郷どんにいうたものじゃ。  
「わしは、邪魔じゃろのう」  
すると、西郷どんはこう答えたものじゃ。  
「おまえが、おいの金玉にとり憑いているおかげで、おいは、喧嘩や戦争や女子が嫌いになりもうした。そんなことしたくても、金玉がいうことききやせん」  
「それでも、重くないかのう」  
「人生は重いものでごわす。それはすぐに忘れそうになる真実でごわすが、そのことを、おいの金玉がいつも思い出させてくれもうす」  
「それでも、厄介じゃろのう」  
「だもんで、おいは、命が惜しくはござらんようになりもうした」

西郷どんが、あの賢明で聡明な西郷どんが、愚鈍で単純な弟子たちのために、命をあずけたのは、わしのせいじゃ。  
そうでも考えないと、西郷どんの最期は説明がつかんからのう。

## 【どれい（土霊）】

んだ、おらは田舎もんだども、莫迦にすんでねえだ。  
奴隷でねえだ、土霊だ、霊力も、すべえもんがあるだよ。

おらは【きれい】や【きんれい】なんかよりも、ずっと活躍したでよ。  
なにを例にだすべえか、悩むくらいのもんじゃが、おらの的には、真田のことだんべなあ。  
真田幸村の人気は、相変わらずすげえかんのう。

【もくれい】はしょっちゅう、関ヶ原の自慢話をするけど、関ヶ原の面白いところは、表の話でのうて、裏の話じゃ。

んだ、いまじゃ有名になっとる〈犬伏の別れ〉（真田親子の密談）に就いて、語るべえ。

兄、信之は、家康の重臣本多忠勝の娘をめとっとるだ。

弟の信繁（幸村）は、大谷吉継の娘をめとっとるだ。

父の昌幸は、家康に裏切られていて信用しておらんだよ。

よって、信之は東軍、昌幸と信繁は西軍と決まっただな。

家臣を分ける際に、昌幸は「これも真田家存続の方法」と伝えたものだ。

けっか、関ヶ原で敗れた西軍に与した、昌幸と信繁は、九度山にて、十年以上蟄居（ちつきよ）となったぞい。

昌幸は臨終（りんじゅう）に際して、信繁に、徳川打倒の秘策を授けたというこっちゃ。

それが、かの〈真田丸〉として実現したわけだべ。

まんず、こんなところが、世間が知っとる真田家の顛末（てんまつ）じゃがのう、歴史の真実は、おらだけが知っとる、というか、おらがおらの判断で決めたことなんじゃぞい。

信じられんなら、ええど、おらは信じてほしくて言うんじゃねえからのう。

昌幸にとってさ、〈真田家〉とは、〈血〉であり、それ以上に〈地〉なんじゃな。だから、もし家康が真田の土地を約束すれば、私怨は捨てて、一族揃って東軍につくつもりだったんじゃ。

それでも思案が尽きず、よって、おれに〈真田家〉の存続を祈願したわけじゃな。

おれはこう示唆（しさ）したもんじゃ。

「徳川の天下においては、真田は存続できん。だば、西軍につくしかなかべ」

それでも、おらの言葉すら信用しなかった昌幸は、念のために嫡子を徳川に委ねたわけなんじゃ。

おらは昌幸を、東軍に与させたくはなかったんじゃ。

それほど、昌幸の権謀術数（けんぼうじゅっすう）はおそろしく、その個性は勝者側には向かんとかながえたからじゃよ。

けんど、おらは【もくれい】に情報を伝えて、【もくれい】の霊力で、東軍が勝利するようしむけたんじゃよ。

しかも、蟄居中に昌幸を死なせて、西軍の復活を抑えたのよ。

もし〈真田丸〉を仕切ったのが、信繁でのうて、昌幸じゃったら、東軍はやられる可能性があったからじゃ。

なぜって、そらあきまっとるべ。

人望のない石田三成には、天下はおさめられんぞい。

もし西軍が勝ってしまったら、また何度も戦さがおきるもんな。

おらは、平和主義者なもんでよ。

だれも信じてくれんがのう。

